

ケプラー問題における r と θ の時間依存性について

1. 復習

講義では、

$$\text{エネルギー保存則 } E = \frac{\mu}{2} |\dot{\vec{x}}|^2 - \frac{\alpha}{r}$$

$$\text{角運動量保存則 } L = \mu r^2 \dot{\theta}$$

$$\text{単純な連鎖微分の式 } \frac{dr}{dt} = \frac{dr}{d\theta} \dot{\theta}$$

から、 r と θ の関係式 (= 軌道の形を決める式) $r = \frac{l}{1 + \varepsilon \cos \theta}$ を導いた。

このプリントでは r と θ の時間依存性を調べる。

1-1. 中心力

中心力 $\vec{f} = f(r) \hat{r}$ では、 $\dot{\vec{L}} = \vec{r} \times \dot{\vec{f}} = \vec{r} \times f(r) \hat{r} = 0$ となり、角運動量保存

1-2. 換算質量

二体問題が一体問題に帰着

$$\left\{ \begin{array}{l} m_1 \ddot{\vec{x}}_1 = \vec{f}_{12} \\ m_2 \ddot{\vec{x}}_2 = \vec{f}_{21} \end{array} \right. \xrightarrow{\vec{f}_{12} = -\vec{f}_{21}} \left\{ \begin{array}{l} \ddot{\vec{x}} = \ddot{\vec{x}}_1 - \ddot{\vec{x}}_2 = \frac{\vec{f}_{12}}{m_1} - \frac{\vec{f}_{21}}{m_2} = \vec{f} \left(\frac{1}{m_1} + \frac{1}{m_2} \right) = \vec{f} \mu \\ \ddot{\vec{X}} = \frac{m_1 \ddot{\vec{x}}_1 + m_2 \ddot{\vec{x}}_2}{m_1 + m_2} = 0 \end{array} \right.$$

1-3. 二つの保存則

$E = \frac{\mu}{2} |\dot{\vec{x}}|^2 + U(\vec{x})$ に、極座標の速度の式と角運動量保存則を代入すると、

$$|\dot{\vec{x}}|^2 = \dot{r}^2 + r^2 \dot{\theta}^2, \quad \vec{L} = \vec{r} \times \vec{p} = \mu (0, 0, r^2 \dot{\theta}) = L \text{ 一定}$$

$$E = \frac{\mu}{2} \dot{r}^2 + \frac{L^2}{2\mu r^2} - \frac{\alpha}{r}$$

という一変数の微分方程式が得られる。

2. 微分方程式を解く

$E = \frac{\mu}{2} \dot{r}^2 + \frac{L^2}{2\mu r^2} - \frac{\alpha}{r}$ は、 $\dot{r} = g(r)$ という形をしているので変数分離で簡単に解けるので、

「 r の時間依存性」を求めよう。

【注】講義では $\frac{dr}{dt} = \frac{dr}{d\theta} \frac{d\theta}{dt} = \frac{dr}{d\theta} \frac{L}{\mu r^2}$ を使って r, θ の方程式にして「軌道の形」を求めた。

2-1. 変数分離の方法

$\frac{dr}{dt} = g(r)$ の形の微分方程式を解く方法。 g の例: $r, r^2 + ar, \frac{1}{r+a}, \cos r, \text{etc.}$

$$\therefore \frac{dr}{g(r)} = dt$$

両辺積分して、

$$\int \frac{dr}{g(r)} = \int dt = t - t_0 \quad ; t_0 \text{ は積分定数。}$$

と、「逆関数」のような形になるので、 r について解いてやれば良い。

2-2. 実際の式を解く

$$E = \frac{\mu}{2} \dot{r}^2 + \frac{L^2}{2\mu r^2} - \frac{\alpha}{r}$$

より、 $\dot{r}^2 = \frac{2}{\mu} \left(E - \frac{L^2}{2\mu r^2} + \frac{\alpha}{r} \right)$ なので、方針通りに変数分離して、

$$\frac{dr}{\sqrt{\frac{2}{\mu} \left(E - \frac{L^2}{2\mu r^2} + \frac{\alpha}{r} \right)}} = dt$$

となる。左辺は、 $E < 0$ なので、 $= \frac{rdr}{\sqrt{\frac{2|E|}{\mu} \left(-r^2 - \frac{\alpha r}{E} + \frac{L^2}{2E\mu} \right)}}$

2-3. r の取り得る範囲

軌道の形は、 $l = \frac{L^2}{\alpha\mu}$, $\varepsilon = \sqrt{1 + \frac{2EL^2}{\alpha^2\mu}}$ によって、 $r = \frac{l}{1 + \varepsilon \cos \theta}$ と書けた。

この定数を使うと、分母=0 の解は、

$$r_{\pm} = -\frac{\alpha}{2E} \pm \frac{1}{2} \sqrt{\left(\frac{\alpha}{E}\right)^2 + \frac{2L^2}{E\mu}} = -\frac{\alpha}{2E} \pm \frac{\alpha}{2E} \sqrt{1 + \frac{2EL^2}{\alpha^2\mu}} = -\frac{\alpha}{2E} \pm \frac{\alpha}{2E} \varepsilon = -\frac{\alpha}{2E} (1 \pm \varepsilon)$$

となるので、

【注】 $E < 0$ なので、 $r_{\pm} > 0$ である。

$$dt = \frac{rdr}{\sqrt{\frac{2|E|}{\mu}(r-r_-)(r_+-r)}}$$

と書ける。この積分は有名で a, ε を定数として、

$$r = -\frac{\alpha}{2E} (1 - \varepsilon \cos \phi) \quad \text{--- A}$$

と置けば、

【注】 ϕ を変えて行くと、 r は r_- から r_+ まで変化する。

$$\begin{aligned} \text{分母の } \sqrt{\quad} \text{ の中身は、} (r-r_+)(r_- - r) &= \left(\frac{\alpha}{2E}\right)^2 (1 - \varepsilon \cos \phi - (1 - \varepsilon))((1 + \varepsilon) - (1 - \varepsilon \cos \phi)) \\ &= \left(\frac{\alpha}{2E}\right)^2 \varepsilon^2 (1 - \cos^2 \phi) \end{aligned}$$

$$\text{分子は、} rdr = \left(\frac{\alpha}{2E}\right)^2 (1 - \varepsilon \cos \phi) \varepsilon \sin \phi d\phi$$

となるので、

$$dt = \sqrt{\frac{\mu}{2|E|}} \frac{\alpha}{2|E|} (1 - \varepsilon \cos \phi) d\phi$$

$$\therefore t = \sqrt{\frac{\mu}{2|E|}} \frac{\alpha}{2|E|} (\phi - \varepsilon \sin \phi) \quad \text{--- B}$$

3. r と θ の時間依存性

B 式に A 式を代入して ϕ を消去すれば、 $r = r(t)$ が求まる。

$\theta = \theta(t)$ は、角運動量保存則 $L = \mu r^2 \dot{\theta}$ より、 $\theta(t) = \int dt \sqrt{\frac{L}{\mu r^2(t)}}$ と求められる。

しかし、形式的にはこのように書けても、実際、式を計算するのは、かなり厄介だ。 $r = r(t)$ を出すだけで、 \arccos が必要だったりする。